

存覚とその子女

『存覚一期記』を中心に――

龍 口 恭 子

はじめに

存覚の思想や人間像を考察するにあたって、常に引き合いにされるのは父覚如であるが、覚如のみが家族であった訳ではなく、父祖伝来の家があり、互いに影響を与え合った妻や子、さらにそれに繋がる姻戚関係の者が多数あり、その存在は看過できない。本稿では『存覚一期記』における存覚の子女についての記述の分析によって、存覚の思想の一端に触れてみたい。存覚の子女については、既に谷下一夢・藤原猶雪・梅原隆章氏らの高説がある。⁽¹⁾しかし近年、地方史における新たな発見、また宗派を超えた仏教史の見直し等によって、これらの人物像がより明らかにできると考えられる。

一 家系

存覚の家系を遡ると浄土真宗の開祖親鸞があるが、親鸞の家系については覚如の『御伝鈔』に詳しい。

それ聖人（親鸞）の俗姓は藤原氏、天児屋根尊二十一世の苗裔、大織冠、近衛大将右大臣 従一位内膳公と号し、（中略）皇太后宮大進有範の子なり。しかあれば朝廷に仕へて霜雪をも戴き、射山にわしりて榮華をもひらくべかりし人なれども、（中略）前大僧正の貴坊へあひ具したてまつりて、鬢髪を剃除したまひき。

『御伝鈔』（浄土真宗聖典 註釈版 一〇四三頁）

天児屋根尊に始まる藤原氏の末裔との名告りは定型的で仰々しいが、日野家の出身である。日野家は藤原内膳の子真夏から始まり、「侍読」という天皇への学問の教授を主とする文官を多く輩出した家柄であるが、親鸞の父有範は何らかの要因で五人の男子（親鸞・尋有・兼有・有意・行兼）を全員僧侶にし、家督を継ぐ者がいないという状態で公の舞台から姿を消している。『御伝鈔』冒頭にいう「しかあれば朝廷に仕へて霜雪をも戴き、射山にわしりて榮華をもひらくべかりし人」にはこの可能性が親鸞にも開かれていたことは決して大袈裟ではなく、覚如の叙述にもそれをなし得なかった無念が如実である。

いわば出家を余儀なくされた親鸞であつたが、比叡山・吉水・越後・関東での生活の後に六十歳を過ぎて帰洛した。関東で生まれた末娘覚信尼は父と共に京都で暮らしていたが、長じて日野広綱と結婚し、覚恵と光玉の二児を得た。ここに日野家との繋がりが再び結ばれたのである。続いて覚恵が日野家光の猶子（尊卑分脈）となり、覚恵の長男、即ち存覚の父覚如は日野俊光の猶子となる等してさらに日野家との繋がりを強くした。殊に俊光は日野一族の中でも、初めて大納言になった人で、覚如の日野家に対する思いは並々ならぬものであつたことも推し量られる。存覚は播磨局を母として正応三年（一二九〇）に生まれた。弟に従覚慈俊がある。

二 存覚の子女

（一）第一子（長女 光女永善（一二三一九年生））

元弘二年（一二三二）存覚 四三歳の時、鎌倉の大倉谷に一家で在住した時、長女光女は禅僧無住思賢の手引でその頃鎌倉の大仏貞直のもとに出入りしていた長楽寺禅尼の養女となる。長楽寺禅尼は花山院師藤を父とし、日野資宣の娘を母とする。存覚の猶父、日野俊光は禅尼の叔父であり、猶父を介した義理のいとこに長女を託すことになったのである。このように存覚が娘を禅尼の養女にすることについては、既に状況は整っていた訳であるが、鎌倉の地で無住の仲介でもって

それを果たした事について、無住の側にもその要因があると考えられる。

無住思賢は和歌山興国寺の法燈国師（心地覚心）の高弟として知られるが、後に京都の妙光寺に移った。妙光寺は花山院師継が我が子忠年の夭逝を悼み北山の別業を妙光禅寺に改めたもので、やがて忠年の弟（心性）を出家させ法燈国師を開山として迎えた寺であつた。師継の家督を継いだ花山院頼兼の子、花山院師藤の娘が長楽寺禅尼であり、思賢が入寺した妙光寺はつまり禅尼にとっては幼くして亡くなった大伯父の菩提を弔う寺だったのである。その思賢は折しも鎌倉に滞在していた。思賢は後に相模の間修寺を創設し、その地で示寂しているから、そちらに移るために鎌倉に滞在していたのではないかと想像される。このような重ねての縁があつて、存覚の娘、光女は「無住禅師の引導」によって、長楽寺禅尼の養子として同宿することになったものであろう。

「長楽寺殿」と称された禅尼については、その名称は何に由来するのか今まで考究したものは見られないが、鎌倉の地に「長楽寺」は存在した。この寺は『鎌倉廃寺事典』によれば、笹目、長楽寺谷に存在したとある。文応元年（一二六〇）四月二九日、大火事があり長楽寺前から亀谷の人家にいたるまで焼亡したと『吾妻鏡』に見え、存覚が鎌倉に至ったのは一三三一年であるから、この火事から既に七〇年経過してお

り、「長樂寺殿」の呼称はこの地の名として残っていたのか、或いは焼失の後に再建されたものか不明であるが、この長樂寺谷は「甘縄」の地に隣接しているということはこの地名を特定する手掛かりになるのではないかと考えられる。即ち存覚一家はこの時、

二月十一日、着甘縄願念（誓海 宿所）

『存覚一期記』（真宗史料集成 第一卷 八七二頁）

とあり、存覚一家が移住するにあたって頼ってはるる来たのは、「甘縄の願念」の招きによるものであった。その地の間近にあたかも存覚の猶父日野俊光の姪である長樂寺禪尼が住んでおり、彼女の大叔父の菩提寺妙光寺の住持たる無住思賢もその地に逗留していたのである。以上のように「長樂寺殿」と称された禪尼の名の由来の推測が許されるのではないだろうか。

光女はその後、一三三四年、一五歳の時上洛、翌年二月、彼岸の中日に出家して法名を永善という。『本願寺系図』によれば、この時の受戒の師は西大寺長老惠善上人であった。その後「円興寺長老」とある。

（二）第二子（長男 光星丸柏庭光祖）

元応二年（一三三〇）の出生。元弘元年（一三三二）一月二二日、渋谷仏光寺炎上により、父・母・姉（光女）・弟（光徳丸）は近江の瓜生津に到り、父存覚のみ関東に赴く。その

時、光祖柏庭は仁和寺の無住のもとにあった。この無住は前述の、姉光女を長樂寺禪尼に仲介した無住思賢であるが、無住は東福寺普門院に移りそれに伴い、存覚の長男柏庭を弟子として預かり、妙光寺から関東へ移ることになった時、柏庭を東福寺の普門院に恐らくそのまま預けおいたのではないか。『鑑古録』によれば、

光助ノ舎兄光祖（柏庭ト号ス）仁和寺ノ辺妙高寺ノ塔主無住和尚ノ附弟ナリ。無住ユヘアテ彼寺ヲ辞退シ、恵日山東福寺ノ普門院ニ間居セラル。光祖モトモニ居住ニツキ、存師モ時々彼ノ寺ヘ往来アテ、海蔵院ノ師鍊禪衲ト入魂シタマフ。

『鑑古録』（真宗全書 第六十八卷 三七三頁）

と、『存覚一期記』にはやや曖昧なところが『鑑古録』では明確になっている。この文面からすると、東福寺普門院に無住が一時滞在の後、関東に移ったと解せられる。

光祖柏庭は延文二年（一三五七）に三八歳で亡くなっている。

（三）第四子（次男 光徳丸光助房宋巧覚樂台）

正中二年（一三三五）八月晦日出生。正慶二年（一三三三）、一昨年、存覚は单身鎌倉に入ったが、その後、家族を呼び寄せ鎌倉に居住したが、この年、光徳丸を静昭法印に預けて存覚は上洛した。その後、光徳丸は右少弁有正の猶子となる。十一月、存覚は光徳丸のために恩賞を申し出た。建武二年

(一三三五) 光徳丸、上洛。この頃、存覚は仏光寺に寄寓していた。建武三年(一三三六)、光徳丸は父存覚と共に塩小路烏丸の興国寺に住した。

暦応二年(一三三九)三月頃、一五歳の光徳丸光助は洛東今熊野瀧尻の天台宗智蓮光院教空の門に入る。智蓮光院は日野家の入寺者が多く、大僧都正兼(日野家長男)・権律師兼禅(日野光国男)・律師禅誉(日野資嗣男)等がある。延文元年(一三五六)十二月二五日、権律師に任ぜられ、延文四年(一三五九)一月一四日には権少僧都に任ぜられる。同年六月には大峰入りの途中、今小路にいた存覚の元に立ち寄っている。

このように光助は天台寺院智蓮光院で修行の後、三五歳で権少僧都にまで昇っている。

(四) 第七子(四男 光威丸素忻慈観錦織寺綱厳)

建武元年(一三三四)二月七日、仏光寺にて出生。暦応四年(一三四二)一月、光威丸は粟津より上洛。康永二年(一三四三)(存覚五四歳)五月、光威丸は毘沙門堂に向い証聞院に住した。九月頃、随心院経嚴の命により、随心院門跡に居住。この時、広橋兼綱の猶子となり、綱厳と号する。一〇月一七日に出家した。貞和三年(一三四七)二月上旬、随心院の経嚴僧正は存覚のもとに帰るよう綱厳に勧めたが、綱厳はこれを辞退、随心院に同宿する。一二月頃、存覚一家は大和に下向し、越

年。観応元年(一三五〇)七月、樋口大宮日野仲光亭において法事讃が修され、存覚・綱厳親子参向。観応二年(一三五二)七月七日、清浄華院に入り、八月二〇日、愚咄の勧めによって近江錦織寺に入り慈空の後を嗣ぐことを約した。綱厳は存覚に存続を嘱望された錦織寺を父に替わって嗣ぐことになったが、その職分をよく守った。

綱厳の書写したものに『看病用心抄』(文和二年・一三五四)『謝徳講式』(延文二年・一三五七)・『六要鈔』(貞治二年・一三六三)・『慕帰絵詞』(応安元年・一三七八)がある。書物の書写については親鸞以来の伝統となっているが、綱厳は兄弟の中でも秀でていたようである。

(五) 第三子、他

第三子(二女愛光)が正中元年(一二三四)に誕生、第六子(三女瑠璃光女心光)が元弘元年(一二三二)に誕生、第八子(五男光誦丸)が延文元年(一三五六)に誕生している。第五子(三男光桂通蔭)については系図では記載があるものの『存覚一期記』では判然としない。これら四人の内、二女愛光は正慶元年(一三三二)に九歳で亡くなっているが、他の子女については不明である。

三 存覚の子女への教育

以上、存覚の八人の子女の個々について、その来歴を略述

存覚とその子女（龍 口）

一六〇

して来たが、存覚は果たして子女達にいかなる教育を施す構想を持っていたのであろうか。

まず第一に、子供達の一人一人の修学・修行の場は同じでないことである。これは存覚が立たされていた状況が複雑であつた故もあるが、行く行くは本願寺の宗主を嗣ぐ立場の子に對しても、親鸞の教義や思想を学ぶということに専念させるといふ姿勢を取らず、宗派も様々な（真言宗・天台宗・禅宗・律宗）寺で学ばせている。これは親鸞、さらにその師法然以来の伝統ともいふべきもので、覚如・存覚も様々な場所で修学している。恐らく幅広い仏教的な素養が真の宗教人を育てるといふ確信がこの一族に一貫していたのではあるまいか。

第二に僧侶の家である一方、文官ともいふべき立場を守っていることである。これも親鸞以来の伝統で、天皇の教育、即ち「侍読」という役割こそ担ってはいないものの、文書に對する徹底した尊敬の念が伺える。それは聖教を読むという僧侶としての基本的な姿勢の上に立っていることは勿論であるが、文字に表されたもの、聖教や伝記の執筆、書写・整理・保管等を厳格に行なうという態度が見られる。「恵信尼消息」が七百年の間この一族によって保管され、二十世紀に至って陽の目を見たのも故無しとしない。

また文官に對する思いは日野家との縁組みとしても現れて

いる。親鸞の出自が日野家であることは、覚如が『御伝鈔』で表明したところであるが、娘覚信尼が日野広綱と結婚したのを始め、覚恵、覚如、存覚と代々日野家と猶子の縁組みをしている。存覚もまたその子女に對して、日野家との猶子の関係を結ぶことを努めている。

第三に真宗の信心の継承はどのように見るべきであろうか。上述のように、存覚の八人の子女のうち、四人は夭折している。四人については、長女光女は長樂寺禅尼の養子になったが、後に出家し、律宗系の寺院の長老となっている。長男柏庭は禅宗の僧侶無住思賢の弟子となり、三十八歳で亡くなっている。また次男光助は天台寺院智蓮光院に入り、天台宗の僧侶として権少僧都になった。存覚自身は親鸞の教えの継承を子女に託したと思われるが、結果的には四男綱嚴がそれを果たしたことになる。

結び

存覚の自伝『存覚一期記』を中心に、存覚が親鸞の思想を伝えるためにその子女に對していかなる教育を行い、どのような人間になることを願ったかをみて来た。『存覚一期記』は原本の焼失により完本ではなく、難解な箇所も多いが、南北朝時代に生きた人間の姿を伝える貴重な書といえる。

1 谷下一夢『存覚一期記の研究並解説』永田文昌堂、一九四三年刊・藤原猶雪『親鸞聖人伝絵の研究』法蔵館、一九五四年刊・梅原隆章『真宗史の諸問題』顕真学苑、一九五九年刊。

2 無住思賢について、『寂室録』の「無住思賢」の項に、「無住は華山院家より出づ。存覚の子光祖は無住の弟子柏庭である」と述べる。(白石芳瑠「法燈国師に就いて」『日本学士院紀要』第六卷第一号)とあるから、無住自身もまた華山院家ゆかりの人であったと考えられる。無住については紀伊由良の大野治先生に御教示頂いた。

〈キーワード〉 存覚、『存覚一期記』、無住思賢、長樂寺禪尼、綱巖、日野家、華山院家

(東方学院講師)

新刊紹介

蒲池 勢至 著

真宗民俗史論

A五判・四五八頁・本体価格八、〇〇〇円
法蔵館・二〇一三年十月